

10月校長講話要旨

○能登半島豪雨

今年の正月1月1日に地震に見舞われ、その復興事業が始まったばかりの能登半島に9月末に豪雨災害がありました。多くの地域では50～100年に一度の降雨を想定した計画規模の降水量を下回っていました。千年に一度の想定最大規模の半分以下の降雨だったにもかかわらず川があふれところもありました。河川工学の専門家によると、地震で護岸や堤防などが被災して洪水災害への備えが弱まり、地震前であれば生じなかった被害が発生した可能性があり、沿岸部分での地盤隆起についても大きな地形変化で河川の流下能力に変化が生じている可能性もあるとのこと。避難先の仮設住宅にまで氾濫した川の泥水が浸水し、これから生活を再建させようという矢先に被害にあわれた方々のことを思うと心が痛みます。亡くなられた方々のことをお悔やみいたします。9月中旬の創造祭でも能登半島地震の義援金を集めていましたが、私たちが能登半島の方々にできることがあったらどんな形であれ支援をしたいと考えます。

○今年60周年のものは

本校は今年創立60周年ですが、60年前1964（昭和39）年は日本にとって、すべては東京オリンピックに収斂する年でした。オリンピック開催に合わせて様々なものができました。都心に外国人向けホテルが建設された他、東京都心と羽田空港を結ぶ東京モノレールも9月に開通しています。

60年前の今日10月1日に、開通したのが東海道新幹線です。開通当初は、東京一大阪間は4時間かかりました。その10日後の10月10日が東京オリンピックの開幕の日です。

かつては、このオリンピックを記念して10月10日は、国民の祝日「体育の日」でした。この「体育の日」は、2000（平成12）年から10月の第2月曜日になり、東京オリンピック2020大会に合わせて、2020年から「スポーツの日」とされました。

○体感の必要性

先週、オーストラリア連邦南オーストラリア州の州都アデレードからチャールズキャンベル校の生徒18人が本校に来てくれました。これは去年本校の生徒が学んだ学校の1つで、今回は私たちが彼らを歓迎しました。

オーストラリアを世界史辞典で調べてみると、「イギリス連邦の自治領。連邦立憲君主制国家」という定義がまず出てきます。あれ、オーストラリアは独立国ではないの？と疑問に思うかもしれませんが、オーストラリアの君主は、少し前まではエリザベス女王で、現在はチャールズ国王です。オーストラリアで使われている紙幣には、エリザベス女王の肖像画があります。また、国旗にはイギリス（正式には連合王国UK（United Kingdom）の「ユニオンジャック」が1/4を占めています。これはオーストラリアの隣のニュージーランドでも同様です。かつてはカナダの国旗もそうでした。ここに挙げた3つの国は、太平洋を挟んで日本にとって非常に大切な国々ですが、形式上はイギリス国王を君主に戴いています。このため、政治上の最高責任者は首相になります。

去年2023年10月に、現在のグローバルコースの高校3年生と、中高一貫コースの高校1年生と一緒にオーストラリアのアデレードに滞在していたとき、インドで開かれたクリケットのワールドカップのテレビ中継がありました。クリケットはイギリスで誕生したスポーツです。このため、かつてイギリスの支配下にあった、インド、パキスタン、バングラデシュ、アフガニスタン、南アフリカ、ニュージーランド、オーストラリアで決勝リーグが行われ、最終的にオーストラリアがインドに勝ち、優勝しましたが、やはりオーストラリアがずっと勝ち続けていたのでテレビ番組では大騒ぎでした。特にニュージーランドとの対戦ではテレビでは非常に盛り上がっていました。クリケットは海外ではサッカーに次ぐ競技人口があるともいわれていますが、1900年のオリンピックパリ大会で実施された後は、競技種目ではなくなり、2028年のロサンゼルス大会で復活する予定です。

哲学館・東洋大学を創立した井上円了先生は、19世紀末から24年間で3回世界周遊の旅に出かけました。最初の欧米視察では「海外のことは日本にいて想像するだけでなく、実際に見て体験しないとわからない」として、「体感」の必要性を実感され、現実世界を活きたテキストとして学び、活

きた学問とする「活書活学」を提唱されました。クリケットというスポーツは日本にいる私たちには、なじみのないものですが、世界中では野球よりも競技人口の多いスポーツです。このことはオーストラリアにいないとわからないことです。やはりその土地で、実際に多くの人たちと交流し、その空気に触れないとわからないことが沢山あります。

視野を海外に広げ、様々な人々と交流することが今まで以上に求められていますから、円了先生のいう「体感」が今まで以上に必要になります。

○クリケットから連想して国際平和を考える

クリケットの代わりに冬場に行われたスポーツがホッケーです。ホッケーには大きく分けるとフィールドホッケーとアイスホッケーがありますが、ここではフィールドホッケーのお話をします。近代ホッケーは19世紀半ば、イギリスのクリケット選手たちが試合のできない冬季に始めたのが始まりだそうです。1871年には最初のホッケークラブが結成され、1886年にはロンドンで協会が発足。ホッケーの盛んな国は、クリケットと同様に、イギリスの旧植民地が多いのが特徴です。

1964年の東京オリンピックの記録映画（市川崑監督制作）を見ると、ホッケーの決勝戦が流血戦になりました。インドが優勝し、銀メダル2位がパキスタンでした。本来オリンピックは平和の祭典であり、国と国との対立を避けることが必要ですが、この時のオリンピックではインドとパキスタンの対立がそのままホッケーの試合に出てしまいました。

なぜ、流血戦になったのかというと、イギリスからインド地域が1947年に独立するときに、ざっくりいうと宗教上の観点からインドとパキスタンに分かれて独立しました。この時はインドを挟んでパキスタンは、東西に分かれた西パキスタンと東パキスタンになりました。独立して間もなくインドとパキスタンは公式の外交関係を樹立しましたが、乱暴な分離と数多くの領土問題は、両国の関係に大きな影響を残しました。地域的な紛争が続き、インドとパキスタンは1964年のオリンピックの翌年には、第2次印パ紛争（インド＝パキスタン紛争）が起きました。1971年には第3次印パ紛争から続いて、バングラデシュ独立戦争になり、東パキスタンはバングラデシュとして、別の国になりました。

国際競技に国と国との対立は持ち込まないという反省もあって、オリンピックや競技ごとのワールドカップでは、国威発揚の機会、場所ではなく、国と国の対立を助長するものではないということが確認され現在に至っています。ですから去年のインドでのクリケットのワールドカップ決勝リーグも競技ではエキサイトしましたが、試合終了後は「ノーサイド」。これもイギリス発祥のスポーツであるラグビーの言葉です。敵も味方もなく、同じスポーツを愛好する仲間同士ということになります。

ところで、この「ノーサイド」を調べてみると、「ノーサイド (no side)」は、ラグビーフットボールでは、試合終了のことを指す古風な英語表現であるとありました。日本では現在でも使用されていますが、現在の英語圏では no side という表現は使われなくなり、代わりに full time が用いられています。日本では「ノーサイドの精神」として「試合が終われば敵も味方もなく、お互いの健闘を称え合い、感謝し、ラグビーを楽しんだ仲間として友情を深める」というラグビーの精神に重ねる言葉として説明されます。ワールドラグビーでは「ラグビーではかつて審判が試合終了を宣言するために“no side”と叫んでいたが、ノーサイドという表現は日本で生き残り、試合終了のホイッスルが鳴れば全員がお互いの違いをわきに置くという意味になった」、また、「カタカナのノーサイドには、試合が終われば敵味方なく称えあうのがラグビーの精神だ、というニュアンスが込められている。試合終了をわざわざノーサイドというのは日本だけだが、そこには「ラグビー道」があることを信じた日本人の美意識が影響していそうだ」とありました。「ノーサイド」は和製英語ー日本でしか通じない英語ーになりつつあるということでした。物事はきちんと調べないとだめですね。今回の教訓です。

○終わりに

今日は東京オリンピックなど60周年のものと、オーストラリアの高校生がきたことを材料に「体感」の必要性、スポーツにおける「ノーサイド」について考えてみました。